※　未提出者への督促後に新たに提出（入力）されたレポートも含めた集計結果です

設問 1（授業科目名・クラス名）

設問 2（科目コード）

設問 3（回答者名）

※　以下、各選択肢の右に該当クラス数を記す。（全回答数に対する回答率も附記）

A（問 4～13）：授業担当者として教授技法や授業内容等に関し、教育活動を自己点検し、次の①～④のうち該当する丸数字を選んでください。　①:あてはまる　②:ややあてはまる　③:あまりあてはまらない　④:あてはまらない

設問 4　シラバスに沿って授業を行えた。

①:17（63%）　②:8（30%）　③:1（4%）　④:0（0%）　未回答:1（4%）

設問 5　学生の理解度やレベルを踏まえて授業内容を設定・調整した。

①:13（48%）　②:14（52%）　③:0（0%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

設問 6　話し方、板書の仕方、機器又は器具の使い方、等が適切だった。

（教授技法の適・不適の観点で柔軟に回答してください。）

①:11（41%）　②:15（56%）　③:1（4%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

設問 7　重要ポイントを明示し、分かり易く説明した。

①:18（67%）　②:8（30%）　③:1（4%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

設問 8　学習意欲や知的好奇心・関心を掻き立てたり満足させる教え方ができた。

①:14（52%）　②:12（44%）　③:1（4%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

設問 9　受講生の信頼を得るような授業態度で授業に臨んだ。

（授業を周到に準備し、休講・遅刻を極力控え、進行を妨げる行為（私語など）に対して毅然として実施した。）

①:16（59%）　②:11（41%）　③:0（0%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

設問 10　受講者とのコミュニケーションを図りながら授業を進めた。

（発問への回答を学生に求めた/学生からの質問・発言を促した/学生の理解度を確かめながら進めた/学生の授業への能動的な参加（アクティブ・ラーニング）を促した　等）

①:10（37%）　②:8（30%）　③:9（33%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

設問 11　授業内容に見合った予習・復習或いは発展学習を課した。

①:6（22%）　②:10（37%）　③:10（37%）　④:1（4%）　未回答:0（0%）

設問 12　総合的に判断して学生を満足させる授業が行えた。

①:15（56%）　②:12（44%）　③:0（0%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

設問 13　シラバスに掲げた当初の授業目標（ねらい）は達成された。

①:11（41%）　②:16（59%）　③:（%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

B（問 14～18）：FD 活動についてお尋ねします。

設問 14　この授業科目に関してこの 1 年間取り組んだ FD 活動を選んでください。**（複数回答可）**

①他教員の授業参観：　6（22%）

②学内外の FD 講演会等への参加：　22（81%）

③他大学の FD 活動の視察：　2（7%）

④その他：　2（7%）

・・・「他大学の憲法のシラバス等の検討、教材研究」、「留学生の授業参加等によるアクティブラーニング」

未回答：　3（11%）

設問 15　今後取り組もうと考えている FD 活動を選んでください。**（複数回答可）**

①他教員の授業参観：　8（30%）

②学内外の FD 講演会等への参加：　23（85%）

③他大学の FD 活動の視察：　3（11%）

④その他：　2（7%）・・・「政治・経済関係のセミナーや講演会に参加します。」、「よりアクティブに議論し自己学習を促進する内容の検討。」

未回答：　1（4%）

設問 16　昨年度も同一科目を担当した方は、前年度の授業評価に基づき、改善した点を書いてください。

該当するクラスのうち、　回答：15 クラス（順不同）

[1] 受講生間の生命科学に関する基礎知識に大きなばらつきがあるため、例年以上に要点を絞り込むように心がけた。その分、レベルとしては例年よりやや下がったと思う。・・・2 クラス

[2] 板書改善に努力した。

[3] アクティブラーニングに適したクラスサイズで授業を行うことができた。

[4] 講義のまとめとして、簡単な英文課題を出した。

[5] 提示する資料の順番を入れ替え、講義と符合するようにした。

[6] 昨年度のレジュメ（事前配布)が詳しすぎたので、今学期は Point だけを記した。

[7] EU 債務問題について扱ってほしいとの要望があったので、一回分の授業をあてた。

[8] トピックス的な内容を導入した。

[9] ニュース、テレビドキュメンタリー等のビデオ等を使用して、内容が理解しやすい授業を心がけた。

[10] 学生の反応を求めるための指名方法に受講者番号を活用するなどの工夫を行った。

[11] 延岡フィールドでの基礎教育科目としては初めての教育実践

[12] 多人数でもコミュニケーションが取れるように、一部リアクションペーパーの導入を試みた。

[13] 授業評価に基づく改善というわけではないが、本年度から再履修以外の学生も受け入れることになったため、受講者の数が飛躍的に増え、学生とコミュニケーションを取る意味合いもあって(少数の時は、直接話すことが可能)、ずっと以前のように、コメントも記載できる出席カードを復活させたところ、予想以上の好反応があり、毎回 7 割近くの学生が感想・質問等を寄せてくれた。その質問に毎回答えることにより、学生との信頼関係がより深まったようである。

[14] まず、今年度は出席要件を復活させたことで、高い出席率を維持することができた。

講義内容についても大幅な刷新を行った。講義の冒頭で「今回の事例」として新聞記事などに触れ、その単元で扱う内容が実社会とどのようなつながりがあるのかを具体的な形で示した。そのことで、ともすれば抽象的になりがちな憲法学の講義内容について具体的なイメージを持ちやすくすることができたと考える。また、配布プリントの末尾には「今回の用語」を掲載し、学生が復習しやすいよう配慮した。

講義内容については、従来よりも扱う項目をより絞ると同時に、さらに平易な表現を多用するよう心がけた。これまでよりも扱う項目の「量」を減らしつつ、その分より掘り下げて扱うことや、より丁寧な解説をおこなった。扱う項目は少なくなったものの、より深みがあり、かつ親しみやすい講義構成にすることができたと自負している。平易な表現の多用については、具体例や言い換え（特に専門用語について）を用いることで、法学の初学者にもより親しみやすいものとなったと考える。

本講義は「日本国憲法」を扱うものであるが、受講生の大半（教育文化学部の学生の一部を除く）は法学の基礎知識を持っていない。憲法学は憲法をどのように「解釈」するのかについての学問であるが、その理解に際しては、法学の基礎知識が大きな助けになる。そこで、講義の前半で法学の基礎知識のダイジェストを扱うことで、後の学習に備えた基礎知識の導入も試みた。

設問 17　自分の授業の評価できる点や反省すべき点、或いは、この FD 活動レポートに関して特記すべき点があれば書いてください。

回答：　12 クラス（順不同）

[1] 毎時配付するプリントについては概ね好評であったと思われる。障がい学生への配慮については、特に問題なく授業を終えることができたと思われるが、今後も別の学生への配慮を行う際には、同様に問題なく進められるか、また、何かが起きたときに適切に対処できるのかは自信が持てない。

[2] コメントの半数近くは、「面白かった」という感想であり、古典文学であるにも拘わらず、現代の学生の興味を惹ける授業が構築できていたのではないかと思う。

[3] 講義に対する熱意。講義時間の都合上、板書の丁寧さに欠けたと思う。

[4] 授業では高い学習到達度を目指している。一方、筆記問題の回答時間が短い、リーディングアサインメントが多く難しいという学生からの不満を耳にする。高い学習到達度への関心の低い学生から評価されていない。この点は課題であるが解決は容易ではない。

[5] 課題として出した英文が学生によっては難しすぎたり、逆に易しすぎたりするので、どのレベルに焦点を合わせるか、難しい。

[6] もう少し学生に問いかける講義をすべきであった。

[7] 初開講であったため、まだ内容におぼつかない点もあったが、概ね学生の知的ニーズに沿った講義を提供できた。ただし、直接の国際交流を望まない学生が若干名いたため、来年度は、第 1 回により詳しい授業概要、シラバスの説明を心掛ける。

[8] 延岡フィールドの実習物品充実

[9] 出席確認のために毎回質問や感想を書いて提出してもらっており、次回の授業時に質問等を考慮した説明ができたのはよかったと思う。・・・2 クラス

[10] これまで同様、出席カードをコメントシートとして活用した。そこでは学生からもたらされた質問にその次の回の冒頭で丁寧に回答をすることで、学生の消化不良を防ぐとともに、さらに発展的な内容にも踏み込むことができた。この取り組みは毎学期学生から評判が良いものであるが、時にはそこに時間をかけすぎてしまうこともあり、時間配分が今後の課題である。もっとも、基礎教育科目の日本国憲法はその科目の性質からも意欲の低い学生の割合がそもそも高いこともあり、冒頭でのコメントシートへの返答の時間はそういった学生へのモチベーション付けにもつながる。今後はそれらの点も踏まえ、適切なバランスを模索していきたい。

学生の授業外での学習についても課題を残している。本講義で扱う内容は、憲法学の中でもオーソドックスな論点を中心に

組んでいるものの、最新の理論や論点も織り交ぜられている。また、各論点の背景に踏み込むこともしばしばあった。本講義で扱う内容には一般的な憲法学の教科書では扱われていない論点や知見も多く織り込まれている。同時に、憲法の教科書では「所与のこと」として省かれているような背景にも踏み込んだため、一般的な教科書には載っていない内容が多く反映された講義であった。

このことから、学生が自分で学習する際に最適な教科書が存在しないという状況が生じていた。まず憲法学の一般的な教科書であるが、それらは法学部の学生を念頭に書かれているため、多くの学生にとっては難易度が高すぎる（前職で司法試験を目指す学生を指導していた際にも、読みこなせない学生がしばしばみられた）。また、一般的な教科書には載っていない内容も多く触れられているため、内容面でも必ずしも十分とはいえない。初学者向けの教科書も多く見られるが、その多くはそれでも難易度が高めであるか、もしくは逆に扱う内容が薄すぎてしまう、という難点を抱えていた。様々な初学者向けの教科書や一般向けの憲法についての本（憲法学者によるもののみではなく、池上彰氏の書いたものなども含む）を検討したが、単体で本講義の「教科書」としての使用に耐えるものは存在しなかった。

このような状況から適切な教科書が見つけられていないことがひとつの課題であり、このことによって学生の自宅学習がしにくくなっていると考える。このような現状を受け、現在本講義の内容を踏まえた教科書を作成中である。その教科書が出版されれば、上記の問題は一掃されると考える。また、その暁には教科書を中心とした「反転授業」もできないか模索していきたい。

［11］本講義は、今年度初めて開講されたもの。主担当は地域資源創成学部の丹生であるが、同じく地域資源創成学部の土屋有先生と共同で授業を行った。授業はお互いの担当回を決めて分担して行ったが、毎回２名とも講義に参加し、時にはコメントを求めたりして、「２人で講義を行っている感」は作り出せたと思う。

講義は、ベンチャービジネスに関わる歴史や理論的な部分については、丹生が担当し、ベンチャービジネスの実情や最近の状況については、土屋先生が担当した。理論と実践という点で、お互いに役割分担をして講義を進められたと考えている。

講義では、毎回最後に、「講義アンケート」を配布した。これは、出欠の確認をとるだけでなく、学生からの感想やコメント等から、関心度合いをはかり、講義の内容に活かしていくためである。A4 用紙を 6 分割（グループワークの際は、裏にグループ分けを書いた 4 分割のもの）したもので、分量はそれほど多くないが、その分、学生が負担感を感じることなくコメントを書いてくれたと思う。学生からのコメントは講義終了後に担当教員間で適宜情報共有を行った。

本講義でのハイライト（特筆すべき点）は２点ある。第１は、実際のベンチャー企業の代表者（株式会社アラタナ・山本稔社長）と、ベンチャーキャピタル（宮崎太陽キャピタル・津野省吾氏）の２名の外部講師を招へいしたことである。ベンチャービジネスは「活きた」分野でもあるため、生の声を是非伝えたかった。講師との連絡調整や講義の進行は土屋先生が行った。外部講師を招いた講義は学生からの評価もとても高かった。

第２のハイライトは、ベンチャービジネスの現場を学ぶために、株式会社アラタナのオフィスを訪問したことである。講義の合間に移動を含めて実施したため、訪問時間は 50 分程度であったが、オフィスの見学や、宮崎大学の卒業生（OB・OG）の紹介、担当マネジャー（山口琢磨氏）から仕事内容の説明もしていただいた。簡易集計だが、当日参加した 38 名（履修登録は 41 名）のうち、33 人が初めてベンチャー企業を訪問した、と回答、「今回の訪問は、ベンチャー企業を理解する上で参考になりましたか？」という問いに対しては、「とても参考になった」が 27 名、「ある程度参考になった」が 11 名であった。「今回の訪問は、今後の将来の進路や就職先を検討する際に参考になりましたか？」という問いに対しては、「とても参考になった」が 25 名、「ある程度参考になった」が 11 名、「どちらともいえない」が 1 名であった。アラタナ社への訪問にあたっては、バス借り上げ代として、一部を基礎教育重点配分経費から充当させていただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。

本講義では、受講者を８グループに分けて（所属学科や性別等を考慮して教員が割り振って提示した）、興味を持ったベンチャー企業について最後にプレゼンテーションを行ってもらった。グループワークは授業外で積極的に行うよう促したが、講義の中でも２回、グループワークを行う時間を設けた。グループワークを進めるにあたって、最初のきっかけづくりは授業内で行い、これによりグループ内の親和性が高まる（グループ内で連絡がとりやすくなる）ことを期待した。発表は 1 グループ 10 分程度だったが、それぞれのグループで自ら「ベンチャービジネス」を考え、具体的な会社や事業内容を調べることによって、シ

ラバスで掲げたベンチャービジネスに対する基礎理解が深まったと考えられる。

なお、本講義のシラバスで掲げた達成目標は以下の通り：　１）ベンチャービジネスに関わる基礎知識を身に付けること、２）ベンチャービジネスの実例を学ぶことで、ベンチャーとは何か、どうやって課題を克服し事業を立ち上げ、成長させるのか、を自ら考えられるようになること、３）グループワークや発表を通じて、コミュニケーション力や実践力を身につけること　の３点である。

本講義では、ベンチャービジネスに関わる理論や実践的な内容の授業を行い、基礎的な理解を行った上で、外部講師による講義、そして、実際のベンチャー企業の訪問も行った。後半はグループワークと発表を行うことで、コミュニケーション能力や実践力の習得、獲得を念頭に置いて講義を進めた。土屋先生、丹生ともに、宮崎大学では初めて行う講義であり、「この講義自体をベンチャービジネスと考えてやっていこう！」を掛け声にして進めてきた。いくつかの細かい反省点はあるが、改めて、シラバスに掲げた授業目標は、全体として「達成できた」と考える次第である。講義内で紹介したビジネスプランコンテストに関心を示している学生も多く、これからも機会をつくってベンチャービジネスに関わる学びの機会を提供していきたいと考えている。

設問 18　FD 活動レポートに関して特記すべき報告があれば添付ファイルで提出してください。

提出ファイル：　なし

C（問 19～21）：中期目標・中期計画のうち「コミュニケーション能力の育成」についてお尋ねします。

設問 19　授業に「コミュニケーション能力の育成」を考慮した内容が含まれていますか？

①はい：　14（52%）　　②いいえ：13（48%）　　未回答：0（0%）

問 19 で「はい」の方は問 20、21 にお答えください。

設問 20　下記のどの点を重視しましたか？**（複数回答可）**

①聞いて理解する：　9（33%）

②読んで理解する：　8（30%）

③自分の考えをまとめて話す：　5（19%）

④自分の考えを文章にまとめる：　9（33%）

⑤討論する：　4（15%）

⑥皆の前でプレゼンテーションする：4（15%）

⑦その他：　0（0%）

未回答：　13（48%）

設問 21　「コミュニケーション能力の育成」に関して具体的な取り組みがありましたら、記述してください。

回答：　7 クラス（順不同）

[1] 講義の初回に計 40(44)ページのプリントを渡し、これを読んで理解の助けになるようにした。・・・2 クラス

[2] 可能な限り授業外の質問を受けるようにした。

[3] 毎回のミニレポート作成と添削

[4] 定期試験のレポートを提出前に交換し、学生同士でパラグラフに分解、分析、評価する。その結果を小グループで共有し、結果をプレゼンする。

[5] 設問 17 で記載の通り、講義では後半にグループワークを行い、後半にはプレゼンテーションを行ってもらった。所属が異なる学生間でディスカッション、発表を行うことでコミュニケーション能力を高める機会を提供できたと考えている。

[6] ともすればただの座学になりがちな基礎教育において、毎回、テーマに沿ったグループ議論を行い、サマープログラムに合わせて留学生を迎え入れる側としての企画を立案・実施させたことは、国際化を意識させ定着を図る上で有効であったといえる。

D（問 22～25）：中期目標・中期計画のうち「地域を教材とする基礎教育/共通教育プログラム」についてお尋ねします。

設問 22　授業に「地域（宮崎）を教材とする」内容が含まれていますか？

①はい：　15（56%）　　②いいえ：　12（44%）　　未回答：　0（0%）

問 22 で「はい」の方は問 23～25 にお答えください。

設問 23　その内容を授業に取り上げるおよその回数を選んでください。

①１～５回：　11（41%）　　②６～10 回：　3（11%）　　③11～15 回：　1（4%）

未回答：　12（44%）

設問 24　「地域」のどのような分野を取り上げていますか？**（複数回答可）**

①歴史・文化：　6（22%）　　②政治・経済・産業：　7（26%）　　③自然環境・フィールド体験：　8（30%）

④その他：2（7%）　　未回答:　12（44%）

設問 25　「地域を教材とした基礎教育/共通教育プログラム」に該当する特色ある活動がありましたら、記述してください。

回答：　7 クラス

[1] 特別のプログラムは組みませんが、地方自治や選挙に関しての講義の時は、「日本一の保守風土」宮崎の実情を講義に入れます。

[2] 全て。具体的には森、牧場、農場、野生動物、船塚ビオトープ、海。

[3] 県の施策を題材に、地域の国際化について講義回を設けた。また、サマープログラムの留学生を迎える企画では、日本や宮崎の文化紹介などを実践させた。

[4] 授業全般において、地域の博物館の活動やイベントについて紹介している。また後半では、各授業の終わりに博物館の収集資料である地域の文化財を紹介するコーナーを設けて、パワーポイントの画像にもとづき解説する他、かるい等の実物や、県内博物館で作成された展覧会目録、パンフレット等を見せている。

[5] 設問 17 に記載の通り、宮崎県に本社を置く企業 2 社（株式会社アラタナ、株式会社宮崎太陽キャピタル）から外部講師として講義を行っていただいた。宮崎という「地域」に対する関心も高まったと考えている。

[6] 地域の魅力を情報発信しているローカル・メディアであるテゲツーの代表者をゲストスピーカーとして講義をしていただいたこと。

[7] ＡＲやＶＲ等のバーチャル技術による観光支援や教育支援（将来的には、農業支援や医療・福祉支援も）等に関する研究を通じて地域産業の活性化を目指しているが、このことを講義にも今後生かしていきたい。